

英国土木学会（ICE）会長 エイドリアン・ロング氏が来会

10月1日ICEのエイドリアン・ロング氏が、副長官ボガール氏と共に土木学会を表敬訪問された。氏は英国のみならずカナダでも教授をされ、多数の土木に関連する賞を受けられている。

情報交換会が開催され、土木学会からは会長ほか学会関係者が出席し、日英両学会の協定改定、両学会の紹介、社会資本と土木技術者の関わり、土木技術者資格の相互承認、技術者の生涯教育などの意見が出された。

今回の日本訪問は、ICEのアジアのICE会員をサポートするためのもので、9日間に渡り、日本の他に上海、香港を訪問される。

（土木学会国際室室長 西村成夫）



写真 御巫会長（右）と英国土木学会会長エイドリアン・ロング氏（左）

土木学会学術交流基金：Study Grant Tourにより、モンゴルからMr.Tulgaが来日

学会は学術交流基金助成制度により、毎年内外の土木研究者を対象とする国際的な学術交流を促進する助成を行っている。その一環としてStudy Grant Tourがあるが、海外の協定学協会から土木技術者を招き、日本の土木技術を学ぶとともに母国の技術の紹介もしていただいている。本年はモンゴル地震研究所主任Mr.Tulga（32才）を学会にお招きした。

氏は、筑波土木研究所、東大地震研究所、鹿島技術研究所、免振高層ビル建設現場などを視察され、熱心に質問をされていた。また、徳島の土木学会全国大会にも出席され、日本・台湾・韓国・モンゴルの土木学協会のラウンドテーブル、日本土木技術者の英語セッションに参加された。また、交流会では阿波踊りを鑑



写真 モンゴルから来日したMr. Tulga（右）

賞し、各国の技術者と親交を深められた。

モンゴルでは、長年ロシアから土木技術を取り入れていたが、最近では日本、欧米からの技術も取り入れようとしており、日本の土木技術に大いに期待しているとのことである。

（土木学会国際室室長 西村成夫）

ビール片手にトークサロン

土木学会トークサロンは夕方ひと時、ビール（or お茶）と軽食を取りながらゆったりした雰囲気の中で講演を聴き、意見交換を行う場であり、今年度第2回目は6月27日午後6時から土木学会で開催された。

講師は、国際水循環観測プロジェクトのリーダーとして活躍されている東京大学教授の小池俊雄会員にお願いし、「地球水危機への処方箋を求めて - 全地球水循環観測の意義」と題して、お話を伺った。

講演は講師が学生の時に、コンパ係を命じた（？）当時の先生、林良嗣企画委員会前幹事長による軽妙な紹介で始まり、終始和やかに進行した。講演のポイントを私なりにつまみ食いし、以下に紹介する。

21世紀は水危機の時代と言われており、洪水、渇水に加えて公衆衛生上の問題、生態系の危機が指摘されている。水問題は途上国だけではなく先進国にも脅威となるものであり、例えば昨年のエルベ川の氾濫では200億ユーロという膨大な経済被害が生じた。

このような水問題を考える時には、視野を広げて地球全体の水循環の変動を観測し、理解し、そして予測しなければならない。例えばエルニーニョ現象は地球の振動現象の一つであるが、この現象の的確な把握により、東南アジア等の降水量を推定可能である。

このため国際プロジェクトCEOP（<http://www.ceop.net>）を立ち上げた。このプロジェクトは全地球の水循環を観測・分析し予測する研究を行い、そのデータを世界中で共有しようというものである。

このプロジェクトの道のりは大変であった。研究者仲間では合意が得られても、それを国際的な枠組みで行うとなると予算化しなくてはならず、先に進まなかった。最終的にはIGOS（国連の統合地球観測戦略）に提案し、その賛同を得て道が開けた。

フロアからは、「ダムや灌漑等の人間活動が水循環に与える影響は？」、「火山の噴火活動の影響は？」、「降水量とエルニーニョの相関度は？」、「気象現象の中でエルニーニョに注目した理由は？」といった水循環についての質問や、「国際機関を動かしてシステムをくみ上げるのは非常に困難だが、その道筋をどうやって搜したのか？」といった、プロジェクトマネジメントに関する質問が出された。

前者に対しては、タイ東北部の森林伐採の影響が9月の降水量の減少を招くメカニズムや、エルニーニョやアジアモンスーンは地球上でエネルギーの変動が大きい現象であり、その影響が地球

全体に伝播するため、これらをより正確に把握することが地球の気候システムの変動を正しく予測することにつながる、等の説明があった。

後者に対しては、衛星を使えば一気に地球全体の水循環変動を把握できることをIGOSに高く評価してもらい、各国の機関に支援要請を出してもらったことが効いているとの説明があった。

小池講師は自身で撮影した、標高5200mの乾燥したチベット高原に雄大に立ち昇る積乱雲の写真を示して、ユーラシア大陸の真っ只中にも地球規模の水循環があることに衝撃を受け、この道に進まれた経験が話された。トークサロン参加者はその写真を見ながら地球水循環システムについて思いを巡らせ、日頃の仕事とは異なったテーマに身を置き、楽しいひと時をすごした。

皆さんも仕事の帰り道、ちょっとトークサロンに立ち寄ってはいかがですか。トークサロンは2か月に1回程度の開催で、参加費は毎回2000円(軽食と飲み物代)です。皆さんの参加を期待しています。

問合せ先: 土木学会事務局企画広報室「土木学会トークサロン」係
TEL 03-3355-3433 / FAX 03-5379-2769
E-mail ; inf@jsce.or.jp

(企画委員会トークサロン主査・清水建設: 黒田正信)

「風景を創る - 道・まち・水辺の新しい姿を求めて -」 景観デザイン研究会設立10周年記念シンポジウム

景観デザイン研究会(会長・篠原 修東京大学教授)が、設立10周年を記念して10月25日に東京大学弥生講堂でシンポジウムを開催した。

伊藤 登氏(同会運営幹事・プランニングネットワーク)により「景観デザイン研究会の歩み」が紹介されたあと、会長の篠原修氏より「風景を創る仕事」の基調講演が行われ、景観デザインを取り巻くわが国の状況が述べられた。次に、エッセイストの辰濃和男氏により特別講演「遍路を歩いて見えてきた風景」が行われた。氏が遍路道を歩いて捉えた美しい風景、車主体の道路設計への見直し提言をはじめ、音環境や雨水利用の話に及んだ。

最後に辰濃和男氏、竹内直文氏(国土交通省)、篠原 修氏、佐々木葉氏(早稲田大学教授)、安江 哲氏(㈱ドーコン)によるパネルディスカッションが行われた。

パネルディスカッションでは、本年7月に発表された国土交通省の「美しい国づくり政策大綱」の話題を中心に議論が展開され、都市のデザインだけでなく、山野を含めた国土のデザインを進め



写真 会場風景

ていくべきとの意見や、政策大綱の理念を実現するためには現在の発注システムを変更する必要があることや人材育成が重要であることが指摘された。

会場は学生を中心に熱心な聴講者で満席であり、北海道や九州など遠方からの参加者も少なくなかった。

(東京大学大学院工学系研究科 福井恒明)

「橋の構造性と景観性の両立」に関する 海外調査が行われる

田中賞選考委員会では、優れた橋梁事例の調査とその作品を考察したエンジニアとの討論を通じて、構造性と景観性の両立を考える海外調査を企画し、6月14日~22日の間にドイツ、チェコ、スペインへの視察を実施した。

まずドイツでは、ベルリン再開発における橋梁を視察し、最近の鋼・コンクリート複合橋梁、コンベ受賞作品等、数橋の橋梁事例を調査した。チェコでは、ブルノ工科大学にStrasky教授を尋ね、斬新で美しい橋を生み出すために何をなすべきかというテーマで討論会、意見交換を行い、プラハ~ブルノ間、ブルノ~ウィーン間の橋梁を視察した。スペインでは、設計コンサルタントのCarlos Fernandez Casado社を訪問し、Trojano氏、Astiz氏と討論を行い、Astiz氏の案内のもとにマドリッド周辺およびサラゴザ周辺の同社設計による橋梁を視察した。

今回の調査では、橋梁における鋼とコンクリート、プレキャスト部材と場所打ち部材の最適な選択と組合せの実現、構造を3次的にとらえ曲線を自由に取り入れた合理的で美しいデザイン等、「構造性と景観性の両立」というテーマを具現する多数の事例を見ることができた。

また、討論会においては、構造性と景観性を両立する斬新な橋梁を継続的に生み出すためのヒントの数々が、話しの流れの中でうかがえた。橋のデザイン、構造、材料に関する豊富な知識と経験が必要であることは言うまでもないが、「橋を愛し」、自ら優れたデザインと合理的な構造を同時に追求する技術者の姿勢が大きな前提であると思う。

これまでのように海外の新しい橋梁構造をそのまま性急に導入するのではなく、いかに発想し、いかに最適な構造を熟考して、愛すべき橋を生み出せたか、その優れた橋梁設計のプロセスを少しゆっくりと勉強してみるきっかけにしたいと考えている。

視察した橋梁と討論会の詳細については、全調査団員の考察とともに、今年度中に公刊される調査報告書(副題「AMAR LOS PUENTES」スペイン語で「橋を愛せよ」)に記載する予定なので、



写真 エプロ川に架かる新幹線鉄道橋